

忘れられない静かなドラマ ①

投函のない 己惚れラブレター

りん進



青山ライフ出版

はじめに

私は六十六才でフルタイムのサラリーマン生活にピリオドを打った。それからはパートと趣味の生活に入った。半年ぐらい二つで過ごしていたが、エッセーが書きたくなった。がどう書けば良いか分からず辞書を見た。すると

「エッセーは、意の向くまま書いて良い」と書いてあった。

「なら、俺にも書けるな」

と、鉛筆書きの自筆で書き出した。

そして書き上った自分の文を読んで気付いた。

「自分の文は何度でも読める」

と。これで

「エッセーは自分で書いて自分で楽しむ、これがエッセーだ」

と思った。

そんな事から自分で書いて楽しみ、知人にも読んでもらったりする様になった。そんな事をしていたら、自分の自筆の文を活字で読んで見たくなくなった。

それを知人に言う

「パソコンで打って上げる」

と言ってもらった。

私は人生を「仕事、本、麻雀、競輪」で過してきた。そんな人生にパソコンは不要、しないと決めていたから、それで活字を見るのは……その気になれなかった。

そんな事から知人には申し訳ないが、本が好きな人生、金はかかっても自分で本を作ろう、と思った。

そして知人にネットで自費出版の会社を教社見つけてもらった。その中から「青山ライフ出版」を選んで原稿を持ち込み読んでもらった。その結果、

「十分本になります」

と言ってもらった。私は

「やります」

と言った。

自分エッセーの自費出版、損は「麻雀、競輪」で鍛えられている。さて結果は？ 自分の本が出来上った時どんな気分になるのだろう。

目次

◆ 忘れられない静かなドラマ(1) 投函のない己惚れラブレター

はじめに	3
投函のない己惚れラブレター	9
サチイちゃんの音	27
とうせんぼ	55
先生とお坊さん	67
大原峠	85
小さな峠	109
あとがき	131

投函のない己惚れラブレター

前略八月二十九日、あなたの通夜に行きました。受付に、いつもの人達がいました。受付を終えあなたの御主人に会い、お悔みの礼をしました。すると御主人は涙をこらえておられるのか、皺しわっばい顔を更に皺くちやにした顔で言われました。

「こうなりました」

この一言で私は、あなたとあなたの通夜を忘れる事はないと思いました。

日常の仕事の中であなたと名刺交換をしたのは、十五年前ぐらいだったと思います。始めて会った時のあなたの大きな体と明るい笑顔を見ながら、

「この人きれいだ、若い時は本当にきれいだっとうな」

と思いました。通夜の席に飾られたアルバムでそれを確認しました。アルバムの中の若いきれいなあなたを何枚か見ていると、一枚に目が釘付けになりました。あなただけが写っている